AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2020.3) 令和元年度:25.

長期入院患者が自宅退院に至った要因－難治性褥瘡の壮年期患者の一事例を通して－

早勢 徹, 橋本 ちひろ, 竹田 弥穂

長期入院患者が自宅退院に至った要因－難治性褥瘡の壮年期患者の一事例を通して－

旭川医科大学病院　7階西ナースステーション　○早勢徹　橋本ちひろ　竹田弥穂

■本演題について、倫理的配慮を行った。

【目的】

難治性褥瘡が原因の感染により入院が長期化した患者に対して多職種で介入を検討し実践した結果、自宅退院に至った。ケア内容を通して効果的な援助内容について明らかにする。

【方法】

対象者は7か月間入院した二分脊椎で褥瘡を有する30代男性1名。入院中のケア内容を看護記録から抽出し要因を分析した。

【結果】

入院時、褥瘡に対する予防行動はとれず、ストーマ造設を頑なに拒否する様子があった。入院後２か月経過したが、治癒しないため多職種でカンファレンスを施行し、褥瘡部の写真撮影と体圧測定を定期的に実施した。結果をもとに予防方法を指導した結果、徐々に褥瘡部に配慮する言動に変化した。その後、褥瘡の悪化により急遽ストーマ造設が必要となったが、拒否なく受け入れ、ストーマケアを自己習得された。入院中、計11回の多職種カンファレンスを実施し、退院前には病棟看護師、理学療法士、訪問看護師で自宅訪問を行い、自宅の環境を整備し自宅退院となった。

【考察】

病状を画像や数値で可視化して本人へ伝えた事で、現状を認識し行動変容するきっかけとなり、治療や褥瘡の予防行動を理解できたと考えられる。また多職種カンファレンスで検討する事で様々な視点で患者を捉えることに繋がり、患者にとって適切な介入方法を検討し実践できたと考える。

【まとめ】

長期入院患者が自宅退院に至った要因は、患者自身が病気への脅威を認識し行動変容をできるように働きかけた事であった。また、多職種でカンファレンスを行うことで、様々な視点で患者を捉えることに繋がり、患者に合わせた介入を実践できた事であった。

利益相反なし